

友人グループを通してみる思春期・青年期の友人関係

須 藤 春 佳

Informal Groups of Friends in Adolescence

SUDO Haruka

要　旨

思春期から青年期にかけての友人関係を考える際、一対一の友人関係だけではなく、友人グループの存在が関わってくる。本稿では、この年代の友人関係における、友人グループの果たす役割や発達的な意義について、サリヴァン（Sullivan, 1953）の前青春期論における「ギャング・グループ」（若年不正規集団）の発達や、保坂・岡村（1986）らの友人関係の発達論（①gang-group、②chum-group、③peer-group へと変化）を手がかりに検討した。一方、友人グループをめぐる中学高校時の難しさについて、須藤（2012）の調査結果等を紹介した。さらには近年の友人グループの傾向について、岩宮（2012）の「ボッヂ恐怖」と「イツメン希求」や、土井（2004）の「優しい関係」に展開される見解、また、最近注目されている「教室内（スクール）カースト」（鈴木、2012）をとりあげた。スクールカーストとは、学級内で、子どもたちがグループ化され、教室内の生徒の「人気」の高低によって、同時に序列化されている状態を指す。須藤（2013）の大学生女子を対象とした調査においても、スクールカーストを経験した者は少なからずおり、それについての意見は、肯定的なもの、否定的なものもあれば、一長一短であるとして仕方ないと捉えているものもあった。

これらの知見を受け、最後に、従来サリヴァンによって示された思春期の友人グループのあり方と現代のそれは異なってきているのではないかという点について検討した。Sullivanに示されるグループ関係では「協力」関係が中心であったのが、現代は「同調」関係が中心であるとみることもでき、現代の子どもたちが、グループに居場所を求め、狭い範囲の人間関係に気を遣い、自らを所属グループに固定化させるのは、自身の核が乏しく、不安定な自身の自己確認を行っているためではないかと考えられた。また、chum-group の肥大化、peer-group の遷延化（保坂、2000）に指摘されるように、仲間関係の発達が遷延化しているとすれば、同時に思春期から青年期の自己形成は、より後に延長されていると考えられた。

キーワード：友人グループ、思春期・青年期、自己形成、スクールカースト

Summary

Thinking about adolescent friendship, not only personal friendship between two people but also informal groups of more than three members play an important role. In this thesis, the role of informal groups of adolescents is discussed, referring to the theory of some researchers. First, the theory of preadolescence by Sullivan (1953) and the theory of developing phases of friendship by Hosaka et al. (1986) are introduced. Sullivan says that “gang-group” develops during preadolescence, in which the group members are engaged with collaboration. Hosaka et al. suggests a theory of the developing phases of friendship from childhood to adolescence; ①gang-group, ②chum-group, ③peer-group. On the other hand, the results of Sudo (2012) suggests the difficulty of the relationship of informal groups, especially during junior high school and high school. Furthermore, some researchers say that the tendency of recent adolescent friendship has been changing. Those are shown in “a terror of ‘Being Isolated’ (Bocchi)” and “a Desire for ‘Belonging to a Regular Group’ (Itsumen)” by Iwamiya (2012), “gentle relationship” by Doi (2004), and “school caste” by Suzuki (2012). School caste means the state of the class; pupils in the classroom are divided into some groups, and at the same time, ranked according to popularity. According to Sudo (2013), many university students answered that they had experienced school caste in their adolescence. Their thoughts about school caste varied, some were positive, some were negative, and the others were both positive and negative.

Finally, it was discussed that the style of informal groups today has changed from that of Sullivan's era. The relationship of Sullivan's informal group consisted of “collaboration”, but the relationship of informal groups of recent adolescents consists of “sympathizing.” Recently adolescents want to belong to one informal group, stick to the group, and care a lot about the relationship with their small group members. Why do they do so? It is discussed that their core self is vulnerable, so they ask for the acceptance of others (their group members). Also, as Hosaka (2000) suggests, the periods of “chum-group” and “peer group” tend to be extended and adolescents' self-making processes may also be extended and delayed longer than ever.

Keywords: informal groups of friends, adolescence, self making, school caste

はじめに

思春期から青年期にかけての友人関係を考える際、一対一の友人関係だけではなく、友人グループの存在が関わってくる。しかしながら、友人関係のなかでもグループを扱った研究は、これまであまりなされていない。筆者はこれまで、前青年期から青年期にかけての友人関係についての研究を行ってきたが、女子大学生を対象とした回想法による調査（須藤, 2012）において、同性友人関係の良かった面と同時に難しかった面についても尋ねたところ、中学生・高校生の頃の同性友人グループとの付き合い方が、彼らを大きく悩ませてきたものであることがわかった。本稿では、この年代の友人関係における、友人グループの果たす役割や発達的な意義について、また、いじめ等の友人グループをめぐる難しさについて、さらには近年の友人グループの傾向について、「スクールカースト」等をとりあげ、検討したい。

I. 友人関係の発達的変化

まず、友人グループというものが、一般的に、どのように発達するのかを見ていくこととする。ここでは、児童期～思春期にかけての心理発達について詳細に論じた、米国対人関係学派のサリヴァン（Sullivan, H. S.; 1953）と、国内の保坂・岡村（1996）の理論に基づき、見ていくこととする。

1. サリヴァンの児童期論、前青春期論

(1) 児童期（少年・少女時代：juvenile era）

米国対人関係学派で精神科医でもあった、サリヴァンによると、児童期とは、就学後の子ども時代を指す。子どもは学校入学と同時に、社会的服従と社会的自己調節が求められ、学校での権威的人物や、自分以外の児童との関係を作り、維持していくという、社会的適合が重要となる時期である。ここでは、自分と似ている人間からなる環境が重要になると考えられており、親の支配を離れた仲間を求める気持ちが熟す時期でもあって、“世界に自分以外の人間がほんとうに棲み始める時期”と表現される。この時期の子どもたちにとって、遊び友達がいることが重要であり、もし現実の友達がない場合は、架空の遊び友達を作りだすくらいに友達を求めるという。

また、この時期の発達的課題としては、同年齢の子ども同士の間で、「競争」と「妥協」の学習をすること、すなわち子ども同士で競い合ったり、折り合いを付けながら仲間と共に生きていく体験が重要であるとされている。一方、この時期の子どもたちは発達途上であり未熟な部分を抱えているので、子ども同士の集団の中で、小集団への差別的な分裂を指す「陶片追放」や、子どもの所属する家庭や所属する社会集団によって、相手に対して偏見を持った見方をしてしまう傾向がある（「紋切型」）ことなどが指摘されている。また、子ども集団の中では、頭が良い、社交的、運動神経がよい、等によって、「人気がある」、「ふつう」、「不人気」などと児童自身が判定される「社会的判定」がなされるという。このように、この時期には、自分以

外の人間と協調しつつ物事を成し遂げていくことが課題となるが、それはまだ比較的自己中心的なところにとどまると思われる。

(2) 前青春期 preadolescence (若者になる手前)

およそ8歳頃～12歳頃、思春期が到来する直前の時期をサリヴァンは前青春期と呼び、児童期や青春期とは独立した別個の発達的段階として重視した。この時期には、家族外の同性の人物との親密な関係に対する強い欲求が現れ、チャム(chum)と言われる同性同年輩の親友との親友関係であるチャムシップ(chum-ship)が結ばれるようになるという。チャムシップにおいては、「相手の満足と安全が自分の満足と安全と同じかそれ以上に大切と感じる状態」を指す親密性(intimacy)が生じ、この時期に一気に愛の能力が発展するといい、チャムシップ関係は、青春期における異性との親密性を形成するうえでの基盤となるという。また、チャムとの関係が形成されると、その関係によって、前青春期以前にできた歪みを矯正する働きもあるとして、この親友関係を重視している。

一方、前青春期の子どもたちは、子ども同士の間で、協業(cooperation)から、共同(協力)collaboration関係を結ぶようになり、それまでのよう自己中心的であった児童期とは異なり、“私たち”ごと(matter of we)に関心を持つようになる。また、前青春期的社会の特徴として、「ギャング・グループ」(若年不正規集団)の発達が挙げられ、このグループは、元来二人組だが、こういう二人組たちがさらに組み合わされる傾向にある。また、グループのなかのある特定の一人が、多くの人たちのモデルになることもあって、このように、集団の中で影響力の強い人を、指導者(オピニオンリーダー)と呼び、他の人々に協力を実行させる力があるという。

以上のサリヴァンの発達論より、児童期から前青春期にかけて、子ども同士の関係性は変化し、児童期には、見方が偏っていたり、やや固定的なグループ集団が、前青春期になると、子ども同士が相互互恵的な関係性を築けるようになると共に、能力のある子どもの力が集団内で評価されるようになり、より有機的な子ども集団が形成されると理解することができる。

2. 保坂・岡村(1996)による友人関係の発達論

国内では、保坂・岡村(1996)は、思春期から青年期にかけての友人関係が、①gang-group、②chum-group、③peer-groupと発達していくとして、友人関係の発達の変化を唱えた。まず、①のgang-groupは、児童期後半(小学生高学年頃～)に表れると言い、これは同性の集団であり、集団にのみ通用するルールに従って行動し、結束を高める。この年齢になると、それまでは親や教師を対象としていた、誰かに認められたいという承認の欲求の対象を仲間に求め、対人関係が広がりを見せる。そして、gang-groupのような集団に属することで、子どもは協調性、思いやり、責任感、集団内での役割を学ぶという。ここで友人グループでの子ども同士のかかわりによって、児童期の課題である、感情を制御する、他者とのトラブルに対処する、自分の意見を主張する、など他者との関係を円滑に保つための社会的スキルなどを身につけることができる。

次に、②のchum-groupは、小学校高学年から中学生頃に表れると言い、同性で、共通の興

味・関心をもつ者同士が集団を形成する。ここでは、類似性を持つ者同士という安心感が集団の基盤となっており、異質性を集団から排除することにより維持される。いじめが生じやすいのもこの時期である。最後に、③の peer-group は、高校生頃に生じるが、ここでの関係は、青年同士が互いの価値観や生き方、理想を知り、理解しようとする関係であり、ピアグループの成因は、相手の異質性を受け入れ、異質な他者を尊重しようと試みるようになるため、異性も含まれる。また、互いに自立した個人としての違いを認め合う共存状態を指す。以上に示す、① gang-group、② chum-group、③ peer-group のような友人関係における発達的変化が生じるのは、青年自身の自己形成の発達と深くかかわっていると考えられる。すなわち、心理的に親から離れ、友人との類似性や共通性、同質性を確認することによって不安の高まる思春期の自己を確認しあい、仲間（友人）に承認を求める段階を経て、やがて友人間の異質性が認められるようになる、という自己形成のプロセスと並行して、これらの友人関係の変化が見られると考えられる。この年代の人たちにとって、友人間の距離感は、自己のありようと深く関わっているのである。特に、友人間の類似性、同質性を求め、異質なものを排除する② chum-group の段階においては、いじめが発生しやすいが、それは、不安な思春期の心を誰かを異質なものとして排除することによって紛らわせているとみることもできるのではないか。

榎本（1999）では、青年期の友人関係の発達的な変化を明らかにすることを目的として、中学生、高校生、大学生を対象に、友人関係を友人ととの「活動的側面」と友人に対する「感情的側面」の2側面から捉え、それぞれの発達的な変化を検討した。その結果、男子は友人と遊ぶ関係の「共有活動」からお互いを尊重する「相互理解活動」へと変化し、女子は友人との類似性に重点をおいた「親密確認活動」から他者を入れない絆を持つ「閉鎖的活動」へと変化し、その後「相互理解活動」へ変化することがわかった。感情的側面については、発達的変化はあまり見られなかった。この結果からも、青年期の友人関係は、一体感を伴う関係や、女子においては一時閉鎖的な関係を経て、相互に尊重しながら付き合う関係へと変化することが実証的にも示された。

一方、最近の傾向として、gang-group の消失や chum-group の肥大化、peer-group の遷延化（保坂、2000）が指摘されている。すなわち、多くの青年が chum-group の段階にいる期間が長く、この段階にとどまり続けていると捉えることができよう。では、このような傾向は、なぜ生じているのだろうか？以降で検討していきたい。

II. 研究調査からみる友人関係グループ

近年の傾向について論じる前に、これまで調査研究によって見出されている友人グループについての知見をいくつか紹介する。

佐藤（1995）では、高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析が行われた。その結果、高校生女子の集団的友人関係は、3人以上からなるグループという形式が中心であり、9割以上の者がグループに所属していることが明らかにされ、実際に行動する場合などの小さい単位での結びつきでは、2～4人程度のグループが6割以上を占めていた。また、

高校生女子がグループに所属している理由は、大きく2つにまとめられ、一つは「浮いた存在になりたくないから」であり、もうひとつは「複数の友人によって支えられているから」であった。ここでは、グループに所属することに対して、積極的と消極的の両面の理由が見出された。彼女たちは、グループに入っていないと高校生活に不便や不都合が生じるから、良い面・悪い面があってもグループに入らざるを得ず、グループは、お互いに自分の安全を高めようという、どちらかというと防衛的な目的のために維持されていることがわかった（佐藤, 1995）。

須藤（2012）では、大学生を対象に、前青年期以降の友人関係において、よかつたことと、難しかったことについて、自由記述形式で尋ねた。その結果、難しかったことについては、中学時代から高校時代にかけての友人グループに関するものが多く、作成されたカテゴリーとしては、「グループ行動、グループによる拘束、束縛」、「グループ内の人間関係」、「グループ内のいじめ」、「グループ間の対立」、「キャラを演じる」などがあった。これらには、友人グループの関係を築く上での難しさに触れたものが多く、友人とうまくやっていくために気を遣い、自分の意見を抑えて友人に同調したり、複数の友人と多様な力動をはらんだ関係を維持することに窮屈さを感じている様子もみてとれた。むろん、「良かったこと」の項には、「性格の前向きな変化」、「心の支え」、「思い遣り、見返りのない友情」等のカテゴリーに分類されるコメントもみられ、友人関係のなかで得られるポジティブな体験について触れられたものもあったが、それと同等に、あるいはそれ以上に、友人関係のなかでも特にグループをめぐる難しさについては、実体験に基づき触れられたものが多かった。この調査から、友人グループ関係をめぐる悩みが、中学、高校時代の友人関係において切実であるということがわかった。

以上の2つの調査結果から、思春期女子の友人グループ形成は、そのことによって仲間から支えが得られたり、かけがいのない友情が育まれる場合もある（須藤, 2012）一方、自己防衛的にグループに属するという事情もみられ（佐藤, 1995）、また、そのグループ関係を維持していく上での気遣いや気苦労、窮屈さなどもあることがわかった（須藤, 2012）。

III. 近年の友人関係の傾向 ~変わってきたところと、変わらないところ~

前項で挙げたように、最近の友人関係の傾向として、gang-group の消失や chum-group の肥大化、peer-group の遷延化（保坂, 2000）が指摘されている。すなわち、多くの青年が chum-group の段階にいる期間が長く、この段階にとどまり続けているという現状が示唆されている。近年、友人関係のあり方が、従来のものから変化してきているのだろうか。このような変化について、以下に挙げる複数の知見を紹介し、検討したい。

1. 岩宮（2012）による「人間関係の規制緩和」、「ぼっち」恐怖

岩宮（2012ab）によると、近年、中学生や高校生は、クラスメイトという、運命的に同じ教室で過ごすことになった人たちとの間にかつては存在していたはずの共同体の感覚が存在しないか、薄くなっているという。彼らは自身のクラスに所属しているという意識が以前より希薄になっていて、“好きな人とだけ付き合えばよい”という意識で同級生との関係を結んでおり、これを岩宮は「人間関係の規制緩和」と呼んでおり、それゆえ、クラス集団という括りではな

く、クラスの中の、特定のクラスメイトとの間の関係のなかで自身の居場所を確保する努力を求められるようになっているという。いわば、「全ての人間関係が自己責任」であり、相手との関係にひびが入ってしまっては、自身の居場所がなくなるため、「居場所を失わないための社会的配慮」がなされ、相手の言動（メールや学校での言動）について深読みをしてきたびれている青年たちの姿がみられるという。

また、岩宮（2012b）によると、最近の思春期の子たちの最大の恐怖は、「ぼっち」（=ひとりぼっち）になることである。一見ふつうに適応している子どもたちの人間関係維持のためのストレスが年々高まっており、そういう子たちは「ぼっち」になることを恐れ、誰かと繋がっていることを強迫的に求めている。学校で「ふつうに」過ごすためには、数人のグループに属しているという結界が必要になっており、いつも一緒にいるメンバーということで、そういう人たちのことを「イツメン」と彼らは呼んでいる。イツメンは仲良い友達とイコールというわけではなく、イツメンがおらず「ぼっち」になっているのは「残念で痛い人だと思われている」と感じられることを避けたいがために求める存在であるという。彼らは、クラスという運命的に同じ教室で過ごすことになった人たちとの間にかつては生じていたはずの共同体の感覚ではなく、イツメンという他者との人間関係のなかに定点を求めている。よって、クラスは各イツメングループの寄せ集めという様相を呈し、それゆえ、個人レベルで誰かに受け入れられていツメンとして認められているかどうかという問題が苛酷なまでにクローズアップされてしまう。イツメンがいなくなることは「ぼっち」になることであり、それは学級に居づらくなることに直結するのである。そして、「イツメン」はかけがえのない「友だち」ではなく、「いつも一緒にいる人」であり、「イツメン」イコール「友だち」というわけではないという状況に慢性的に疲れている子が増えている、と指摘する（岩宮、2012b）。

以上の指摘より、近年の中高生の仲間関係（同級生同士の関係）は、仲が良いから、内面的に惹かれあう、響きあうものがあるからといった理由で一緒に居るのではなく、「人からボッチだと思われたくないから」一緒に居る、という消極的な理由で自分の付き合う人を選び、グループを形成しているという傾向があるのでないだろうか？

2. 現代の若者における「優しい関係」（土井、2004）

社会学者の土井（2004）は、現代の若者における「優しい関係」を指摘する。最近の傾向として、青年たちの振る舞いが、親密圏内か否かで極端に変わるさまを示唆しており（「心の中の二極化」）、親密圏内の付き合いである友人関係においては、過剰な配慮がなされる一方、公共圏では周りの目を気にせずふるまうように「他者の不在」があるという。土井の示す、親密圏における「優しい関係」とは、人間関係の対立を回避するため、関係の維持に神経を遣い、そこから狭い範囲での関係の固定化が生じている。また、彼らが親密圏内の人間関係において「優しい関係」を求めるのは、「自分らしさ」の脆弱さゆえであり、そこでは、強力な自己承認欲求があるという。一方、「優しい関係」における感覚的な一体感による関係、互いの共同幻想として成立する鏡像関係には、つねに破綻の火種が潜在し（土井、2004）、それは本来的な意味での信頼感をベースにした人間関係と質を同じくするわけではないと考えられる。また、

近年急速に普及しているケータイは友人関係のなかで大きな役割を果たしているが、土井によると、ケータイはいまや若者にとって日常生活を送るためのライフラインであると同時に、自己を確認するための「鏡」であり、自己確認のための常時接続ツールであって、これが相手への依存性を高めているという。いわば、「フルタイム化した緊密な人間関係」が形成されており、ケータイという装置により同質的な人間関係が疑似的に保たれる一方、自分と異質な存在への過剰な反応を促進している。土井によると、「優しい関係」においては、一方では純粋な関係を求めながらも、他方では偽りに満ちた人間関係を嘗んでいかざるをえず、その結果、同質的なつながりへの期待値はますます高められていくというような、ジレンマがあると示唆している。ここに示される土井（2004）の指摘も、近年の青年の友人関係のありよう、すなわち、身近な人との関係に気を遣い、狭い範囲内に終始する人間関係のあり方を示している。

以上、岩宮（2012ab）の知見にも、土井（2004）の知見にも、近年の思春期の子どもたちの、身近な人間関係の維持に気を遣い、エネルギーを注いでいるよう共通して見受けられる。また、彼らがそのような付き合い方をする動機付けとして、自身の居場所を確保するためや、自己確認をするためというような、自己都合的で自己保身的なものがその多くを占めるということをみてとれるのではないか。

3. 「スクールカースト」という概念の登場

近年、中高生の仲間関係を描写する表現として、「スクールカースト」が注目を集めている。本項では、この概念についてみていきたい。

（1）学校内のカースト制度（岩宮、2009）

臨床心理学の立場から、岩宮（2009）は、その著書の中で、「学校内のカースト制度」について言及する。スクールカウンセラーとして中学生に関わる中、「学校内にはまるで身分制度があるみたいだ」と話す生徒の例を出し、自覚の程度は個人差があるものの、学校内でのグループの力関係についてこういう認識をしている子どもは多く、いわば、「学校における裏のカースト制度」があると指摘する。ここでの身分はおよそ5段階に分かれてグループを形成しており、洋服や髪型に気を遣っていて面白い話題に事欠かず、目立つ「派手な人たち」が一番目のグループに入り、二番目三番目の位置の人たちは、一番目のグループの人に認められたい、できることならグループにいれてもらいたいと思っている。四番目五番目に位置する「地味な子たち」は目立たず、アニメやアイドルなどの趣味嗜好や、部活や勉強に打ち込んでいる人たちもこの位置におかれる場合があるという。なお、岩宮によると、この身分制度のことを気にしている人たちにとって、それまで所属していたグループから排除されることは教室での居場所がなくなることにつながる。特に何かに打ち込む気持ちもなく、学校にいることに積極的な意味を見出しが難しい子は、同級生のなかでの位置が、自分を学校の中に定位させるための唯一の拠り所になり、自分の位置という拠り所が揺らぐことは、自分自身の存在が揺らぐことに直結してしまうので、身分制度という呪縛にとらわれてしまいやすく、学校での人間関係のストレスも強い。また、彼らはどんなにグループの居心地が悪くても、そこから除かれないために、信じられないほどのエネルギーを使うという。一方、勉強やクラブ活動という学校の

価値観に沿って自分の位置が定位できる人や、自分の趣味の世界に没頭することができる子たちは、そうでない子に比べて人間関係での序列にとらわれることは少ない。

さらに、彼らには、少数の身内グループ以外は、クラスメイトであっても「他人」であり、「他人」には何を言ってもかまわないし、どう思われてもかまわないと思っている傾向がみられるといい、岩宮によると、同じ年の集団の中で適応するということは、少数のグループでの人間関係のみにエネルギーを費やすことになってしまう場合があるのだという。このように、学級内の「自分の位置」に敏感になり、そのことにエネルギーを費やし身近な人間関係に気を遣う思春期の人たちがいることが、指摘されている。

(2) 「教室内（スクール）カースト」（鈴木、2010）

鈴木（2010）によると、教室内（スクール）カーストとは、クラス内の友人グループ間における非公式なステータスの序列のことであり、教室内の生徒の「人気」の高低を要因として、生徒の人間関係に序列構造を生み出し、それが教室内の生徒間で共有されることによって、明確な「身分の差」となって現れる現象を指すという。たとえば、クラス内の非公式的な友人グループが、1軍、2軍、3軍（Aランク、Bランク、Cランク）のようにランク付けされ、序列化される。そして、この序列の下位におかれた生徒は、クラスメイトから身分の低い存在、目下の存在だと見なされて、いじめの標的になりやすく、たとえいじめにあわなかつたとしても、自分に自信をなくし、学校生活への適応に大きな影響を及ぼすと指摘する。

鈴木は、「スクールカースト」による「身分の差」が、生徒の学校生活へ与える影響について調べるため、中学2年生2874名を対象に調査を行った。その結果、スクールカーストは学校適応と自己肯定感に関連があり、スクールカースト中位群が一番いじめの標的になりにくかった。また、この調査によって、スクールカーストは、学力よりも生徒の学校適応を強く規定することがわかったとともに、生徒のコミュニケーション能力がスクールカースト地位に影響することが明らかとなり、自己主張力、同調力が「スクールカースト」に影響するが、共感力は「スクールカースト」に影響を与えることなく、容姿は「スクールカースト」に大きく影響していた。また、「スクールカースト」が高いほど「（自分の気持ちと違っても）人が求めるキャラを演じてしまう」傾向があった。以上より、「スクールカースト」は、生徒の学校適応や自己肯定感に影響を与えることが示されたとともに、スクールカーストを成立させているコミュニケーション能力とは、共感力ではなく、自己主張力や同調力であることがわかった。自己主張する人とそれに同調する人からなるグループ関係であると言えるのだろうか？そして、周囲の期待に応える形で「キャラを演じる」ふるまいは、スクールカーストの上位になればなるほど求められるということであろうか？これらの結果から、スクールカーストに示される現代の思春期の仲間関係とは、上位のグループが集団に期待された役割を演じ、それに同調する人たち（この人たちも小集団を形成している場合もある）からなるグループ関係という姿が見えてくるのではないか。

(3) 「スクールカースト」についての調査結果から（須藤, 2013）

以上に示したようなスクールカーストについて、筆者が大学生を対象にアンケートを実施した結果、「スクールカーストを経験したことがあるか？」という質問に対して、「はい」と答えた人が46名、「いいえ」と答えた人が16名であった。また、その時期についても尋ねたところ、小学校高学年～高校にかけて経験したとの回答があり、中学時代に経験したと答えた者が多かった。スクールカーストの定義については、鈴木（2010）にならい、「クラス内の友人グループ間における非公式なステータスの序列のこと。教室内の生徒の『人気』の高低を要因として、生徒の人間関係に序列構造を生み出し、それが教室内の生徒間で共有されることによって、明確な『身分の差』となって現れる現象」と示し、「このようなグループ（の序列化）があることは、学校生活を送る上で、どうでしたか？（良かった点／悪かった点、やりやすかった／やりにくかった、など自由に書いて下さい）」、「こののようなグループ（の序列化）があったことについて、どう思いますか？」という質問に対する回答（自由記述）は様々で、肯定的な意見もあれば否定的な意見もあり、その両方を見据えているものもあった。表1に、それらを抜粋して示す。

この調査結果にあるように、「スクールカースト」に示される、分断されたグループ化は、当事者たちにとって決して悪いことばかりでもなく、クラスの行事を進める上で上のグループが引っ張ってくれるという点でポジティブともとれる評価もされている。むしろ、「いいか悪いかは別として仕方ないことだと思う」と言い、「上手くまとめていくのは上のグループの一種の役目であるとも感じる」（傍点筆者）という意見もみられた。一方で、クラスメイトの間に上下関係が生じることで、いじめなどに発展しかねないという点から、否定的にとらえている人もいた。上の表の中の、「一長一短だが、仕方ないという意見」の中には、このようなグループ化現象についての良い面と悪い面を同時に評価し、「グループの序列化はない方が良いと思うが、クラスを仕切るリーダー的な存在（人気者）は、物事を円滑に進めるには必要なものだった」として、このような現象が起こることを仕方ないことととらえ、また必要であるとも述べているものもあった。また、このアンケートを進めるなかで、このような現象は決して最近になって突然現れたものというわけではなく、昔からあったのではないかという意見もみられた。

4. 仲間関係を取り巻く状況の変化と、現代思春期の子どもたちの傾向

前項までで、昨今の友人グループを取り巻く状況についてみてきた。ここでは、これまで紹介した見解に基づき、従来の友人グループのあり方と、昨今のそれとがどのように共通しており、また異なっているのかについて検討する。ここで、従来の、本稿でいう Sullivan による前青春期社会の仲間グループのあり方と、現在のそれについて比較するため、両者を模式的に図示した（図1）。Sullivan のいう前青年期社会は、図1における左のイメージであり、親友関係をもつ人同士が組み合わざり、グループが形成される。また、グループの中で、一人が複数人と親友関係をもつこともある。また、その中の誰かがオピニオンリーダーになることもあるが、それはリーダーとして皆を協力させることのできる能力を伴ったリーダーである。この時

表1. 「スクールカーストについてどう思うか?」という質問に対する回答例（須藤, 2013）

<u>良かったという意見</u>
<ul style="list-style-type: none"> ・決めごとがあると中心グループ人が決めてくれるし、率先してくれるので、その点やりやすかった。 ・私は比較的地味な方だったので、とくにいじめはなく、目立つ人達が、話を進めてくれたり、リーダーシップをとってくれたので、あまりスクールカーストによってやりにくいと思うことはなかった。 ・率先して仕切っていってくれ、みんながそれに従っていっていたので私はよかったです。 ・良かった点は、行事などがあったとき上位群がもりあげてくれる。逆に悪かった点は、下位群の子が上位群に対して意見を言えず、上位群の指示に従っていたところ。
<u>一長一短である、仕方がないという意見</u>
<ul style="list-style-type: none"> ・このようなグループの序列化は、仕方のないことだと思う。類は友を呼ぶと言うように、明るく社交的で活動的な子は、そういう子同士で固まるし、どちらかと言うと、おとなしく、積極的でない子は、そういう子と固まると思う。それがたまたまグループ化して、活動的な子がクラスの主導権を握って、そこから序列化が生まれると思う。 ・いいか悪いかは別として仕方ないことだと思う。たとえば、何かを決める際にあまりクラスのことを見ていない子やおとなしいぼーっとしている子が仕切っても進まない。そういうことがあるので、グループ化され、それにより運営されていくのは自然な流れだと思う。しかし、乱暴にするのではなく、そこを上手くまとめていくのは上のグループの一種の役目であるとも感じる。 ・誰かが誰かに対して言いなりにならざるを得ない環境になってしまうので、グループの序列化はない方が良いと思うが、クラスを仕切るリーダー的な存在（人気者）は、物事を円滑に進めるには必要なものだったと思う。
<u>良くないという意見</u>
<ul style="list-style-type: none"> ・グループの順序があることで、いじめがあつたりもしたので、よくなかったと思う。 ・クラスに力のあるグループがいると、常に、彼らに気を遣わないといけなく、たまにクラス全体がギスギスするような感じを覚えた。グループが上位と下位にわかれたことで、強者と弱者がはっきりし、いじめや服従関係が起きやすくなっていると思う。 ・みんなが平等な立場であることが、一番の平和だと私は考えているため、ランク付けなどしてほしくなかった。 ・このようなスクールカーストはなくすべきだと思う。上にいる人が人の苦しみを知らないことは理不尽であると思う。皆が平等であると言っておいて実際はそうではないことがあってはならないのではないか。

Sullivan のいう前青年期社会
(A=B=C)

今の思春期社会
(A>B>C : グループに序列あり)

※A、B、C は、グループを指す。

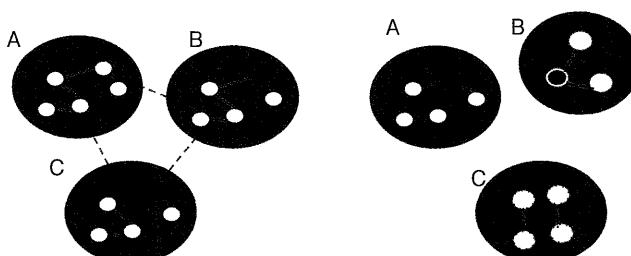


図1. Sullivan のいう前青年期社会と、今の思春期社会の友人グループ関係

期の子どもたち同士の間では、協業 (cooperation) から、共同 (協力) (collaboration) 関係を結べるようになっており、自己中心的であった児童期とは異なり、“私たち”ごと (matter of we) に関心を持つような仲間関係である。いわば、リーダーを中心に、グループメンバーが相互互恵的な関係を結び、グループ全体として皆が協力しあうような有機的なグループであり、かつ、グループ間にコミュニケーションがあり、緩やかではあってもグループ同士の間につながりがある。一方、今の思春期社会は、図1の右のイメージで示されるのではないかと考えられる。グループ間のコミュニケーションはほとんどなく、グループ内で世界が完結している。これは、岩宮 (2009) の指摘にもあるように、グループの外の人は「他人」と捉える最近の傾向にも裏付けられる。また、グループ内の関係も流動的で、グループのメンバーが排除されたりするなど、同じグループに属するからと言って、いわゆる親友関係とはいえない間柄である。さらには、クラス内での自身の居場所として、グループに自身の位置を確保するため、グループ内のメンバーと絆を強めようと内向きになり、気を遣う。図のなかの、点線の関係を維持することに必死になり、相手と気が合うから、話が合うなどの内面や性格によって惹かれあう友人関係というより、居場所としての友人関係があると考えられる。彼らが友人間でとっているコミュニケーションは、小さな世界の中で、自分の位置を確保しようとする試みと気遣いからなり、それゆえ、「スクールカースト」の調査 (鈴木, 2012) にみられるように、グループ関係を維持していく上で重要となるのは「共感力」ではなく「同調性」「自己主張力」であり、「(自分の気持ちと違っても) 人が求めるキャラを演じてしまう」傾向なのである。これらの気遣いや配慮は、集団の中での自分の位置を探りながら生活する処世術のひとつでもあると捉えることができる。Sullivan のグループ関係に示されるような、グループが協力しあい、まとまりをもつ有機的なつながりではなく、いかに周りに合わせていくかが重視されるつながりであり、それゆえ、グループの個々人の本当の意味でのつながりは希薄であると言えるのではないか。餅川 (2011) は、教育学の立場より、現代におけるいじめの構造イメージを示しているが、それは、クラスの中にいくつもの小さな“仲良しグループ”があって、それぞれが孤立して互いに関係をもたない。各グループは、「閉じた状態」で“排他性”をもっているのが特徴であり、クラス集団というものが成立していないと指摘する。この傾向は、特に女子に強いといふ。

では、このような状況は、何故生じてしまったのだろうか？もちろん、本当の意味での親友関係を築いている思春期の子どもたちもいるだろうが、小グループの友人関係のなかに終始する傾向がみられるのは、何故なのだろうか。ひとつには、グループに所属する理由として、自らの居場所を確保する目的があり、グループイコール自分という認識が強く、自らの所属するグループがイコール自分自身であって、自身のアイデンティティを所属グループに求める傾向が強いのではないか。自分を特定のグループに所属する「○○系」の人間と位置付けることによって、クラス集団内での自らのアイデンティティを得ているのではないか。いわば、自分自身に対して周囲から見てわかる「私はこういう人間です」ということを示す「ラベル」のようなものを貼っているのではないかとみることもできる。彼らは似たような者からなるグループ、保坂 (1986) のいう chum-group を形成し、そのなかで似たような外見、服装、価値観の者たちに囲まれ、時には同調しながらふるまい、周囲に承認されることで、不安な自己を保ち、

またそこで自己確認しているのではないだろうか。このような現象は、核となる自分自身が揺らいでいることの表れでもある。小グループが、いわばひとつの人格のような存在で、クラスの中には、「にぎやかな」「派手な」「地味な」等のラベル付けをされた人格が分離して存在しているとみることもできるのではないか。このようなグループ化は、昔からあったのかもしれないが、グループがラベル付けされ、しかも序列化されて、グループ間の交流が乏しい（グループが別の人とは交流しない）というところが近年の特徴であるといえる。

餅川（2011）は、このような現代思春期グループの状況を考慮した上で、教師は、グループ化や排他性を生徒たちが自立していくために必要な経験として肯定的に捉え、学校行事などの機会を通してグループ間の交流ができるようにクラス運営をすることが課題になると指摘する。餅川は、排他性のあるグループ形成を、発達上的一段階と位置付け、否定的にはばかりはしていないが、以前は、生徒たちが自主的に交流していたグループ同士の関係を、今は教師がアレンジしなくては交流が難しい状況にあるとみることもできる。これは、思春期の子どもたちが、自分探しの段階で、所属グループのカラーと合わせて「自分は～系」と位置付けることで、自身のモデルを探していると共に、そこに、一定のパターンを求めているとみることもできるのではないか。

以前から、グループのカラーというものや、カラー別にクラスメイトを見ていたこともなかったわけではないが、昨今において、「スクールカースト」という概念が出てきて注目されるようになったのは、思春期青年期の子どもたちに、このようなラベル付け、パターン化して人（もしくは自身のことを）を分類してみようとする指向性が高まっていることの表れかもしれない。従来より、「活発」「おとなしい」「個性的」などの特徴によって、クラスメイトをカラーに分けて捉える傾向はあったと思われる。しかしながら、昨今においては、「～系」という言葉を使って思春期の子どもたちが自分や周囲の人をタイプ分けをする傾向があるように、この傾向が強まっていると言えるのではないか。自らの居場所をグループに求め、グループにふさわしい「キャラ」を作り友人同士が関わるありようには、自分と異なる「キャラ」の人と付き合うことが、自分の「キャラ」が脅かされることになるため、あえてグループ外の人とは付き合わないのかもしれない。彼らは自らのカラーやキャラが脅かされることを恐れ、身近なグループ内の人間関係に留まっているとみることもできるのではないか。それだけ、子どもたちの、一対一の個人として向き合う力が弱くなっているのだろうか？自分の核がない人ほど、その状態で人との関係を求めるため、何らかの「キャラ」を身に着ける術を求めているのではないか。

グループの中の自分に同調することと、自分の本当の思いとののはざまで難しさを感じていた女子大学生のコメント（須藤、2012）にあるように、「グループの中の自分」と「一人の意思をもった個人としての自分」との乖離のなかで葛藤できる力のある人は、グループでの体験をばねにして自分作りをしていくのかもしれない。また、多くの思春期、青年期の人々は、グループとの距離を測りながら、ゆっくりと自分を作っていくのではないかと考えられる。chum-group の肥大化、peer-group の遷延化（保坂、2000）に指摘されるように、これまで中学生時代に形成されていた chum-group が高校、大学と延期され、異質なものも受け入れ、ぶつ

かりながら付き合っていく peer-group 形成がさらに遅くなっている傾向があるとするならば、思春期から青年期の自己形成は、より先延ばしになっているといえるのではないだろうか。以上の状況をふまえ、今後は、グループに属する自分と、自分作りという関係について、引き続き検討していきたい。

文献

- 土井隆義 (2004) 友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル. ちくま新書.
- 岩宮恵子 (2009) フツーの子の思春期. 岩波書店.
- 岩宮恵子 (2012a) 日本箱庭療法学会研修会講演より
- 岩宮恵子 (2012b) 「ぱっち」恐怖と「イツメン」希求. 現代思春期・青年期論 2012 精神療法 38(2), 233-235. 金剛出版.
- 保坂亭・岡村達也 (1986) キャンパス・エンカウンター・グループの発達的・治療的意義の検討—ある事例を通して. 心理臨床学研究, 4(1), pp. 15-26.
- 三好智子 (1999) 女子友人グループについての理論的考察. 京都大学大学院教育学研究科紀要 45, 353-361.
- 餅川正雄 (2011) 学校のいじめ問題に関する研究 (3). 広島経済大学研究論集 34(1), pp. 51-70.
- 須藤春佳 (2012) 女子大学生が振り返る同性友人関係—前青年期から青年期を通して—. 神戸女学院大学論集第59巻第2号, pp. 138-145.
- Sullivan, H. S. (1953) The Interpersonal Theory of Psychiatry. 中井久夫他訳 1990 精神医学は対人関係論である. みすず書房.
- 鈴木翔 (2012) 教室内 (スクール) カースト. 光文社新書.

(原稿受理日 2014年3月2日)